

「通常の学級で生かされる力を育てる通級指導を目指して」

三田市立けやき台小学校

教諭 佐野 敬一

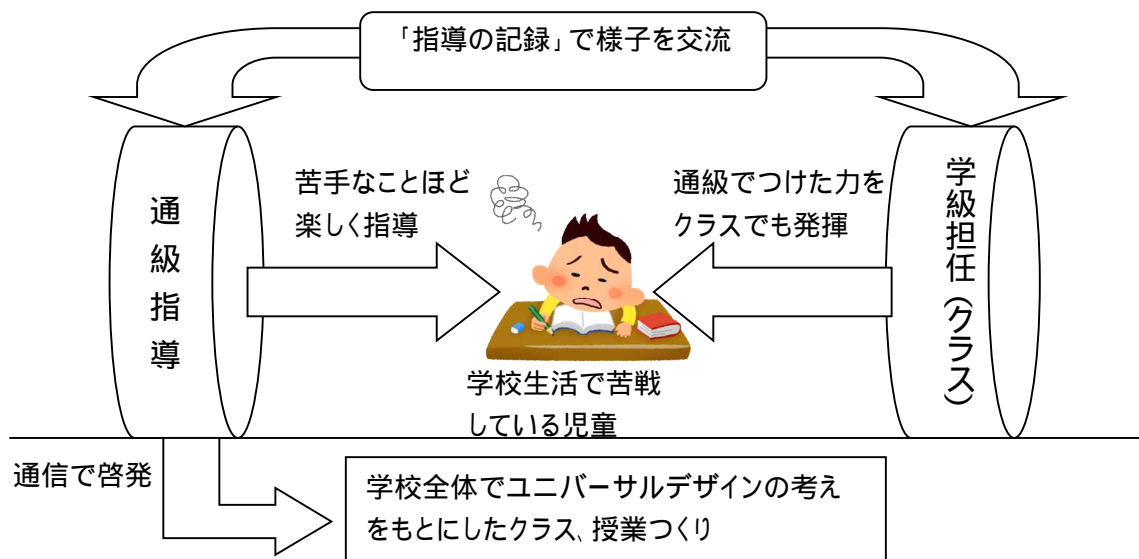
1 取組内容・方法

(1) はじめに

学校生活支援教員として通級指導にあたるようになり 7 年が過ぎた。三田市では現在小学校 5 校、中学校 2 校が通級指導の拠点校となり、7 名の学校生活支援教員が学校生活で苦戦をしている児童・生徒の個別指導にあっている。それでもなお各学校には通級指導を受けることが望ましいと考えられながらも指導を受けることができない児童・生徒が多く存在する。それだけ通常の学級の中で学習や生活で困り感が強く、苦戦をしている児童が多いということが言える。学習でのつまずきから自己肯定感が下がり、生活全般への意欲をなくしていったり、友だちとのトラブルから自分の居場所がみつけれなくなり、自尊感情が下がってしまっている児童・生徒が多い。そういう児童・生徒にとって、困り感の背景にあるものをアセスメントからさぐり、困難さの軽減、克服を目指して自立活動を中心に指導をしている通級指導は大変有効である。教職員の間にも通級指導の有効性が認知され、通級指導へのニーズが高まっていることが感じられる。また保護者から通級指導を受けたいという申し出があるケースも増えてきている。

しかし通級指導だけで学びが完結するのではない。通級指導で付けた力や気づきをクラスで生かせないと意味がない。そのために通級指導がクラスに返るときの「カタパルト」の役目を果たせるよう、担任と連携を取りながら日々の指導にあっている。

また、通級指導での学びがクラスでも生かされるように、通常の学級でのユニバーサルデザインの考えを取り入れたクラス、授業作りも大切である。通級指導とクラスでの取り組み。この両輪があってこそ通級での指導が生きてくるものと考える。



(図1 通級指導と学級担任、対象児童の関わり)

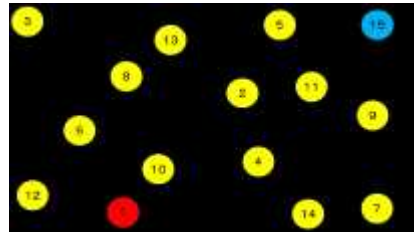
(2) 通級では苦手なことほど楽しく学ぶ

通級指導の中では自立活動を中心にして、子どもの特性からくる困難さを軽減、克服することをねらいとして指導をしている。個別指導の良さを生かした有効な指導ではあるが、子どもにとって一番苦手な、嫌なところに焦点を当てて学習していくことになり、拒否感が出たり、集中が続かなかったりすることもある。そのため、苦手なことほど楽しく学べるように工夫をしている。以下に具体的な事例をあげる。

ナンバータッチで自分自身への挑戦!

眼球運動に弱さのある児童や集中が維持できにくく児童に、パソコンで作成したナンバータッチを実施している。1~5、1~10、1~15、1~20の画面を次々にタッチをしていく課題である。毎回タイムを計測し、エクセルでグラフ化することで振り返りができ、「もっと速くなりたい」という向上心につなげようとしている。他人との比較ではなく、自分との比較であるので、勝ち負けにこだわりのある児童にも抵抗なく取り組める。またグラフ化することで自分の成長を可視化することができ、「4月より、こんなに速くなったよね」と具体的に褒めることもしやすい。

(写真1 ナンバータッチの画面)



カードゲームを使って、語彙を増やす!

自分の言いたいことをうまく言葉に乗せて表現できない、当然知っているであろうと思われる言葉を知らないなど、通級指導を受ける児童には、語彙力に問題がある場合が多い。教科書を使って意味調べをしたり、プリントで学習をしてもなかなか積みあがらないので余計に言葉の勉強が楽しくなくなってくる。そこで、プリントなどを使っての学習もしながら、楽しく言葉の学習ができないかと考え、知育玩具等を探していると、いろいろなゲームが売られていることがわかった。

(写真2 「もじぴったん」)

「もじぴったん」(メガハウス)は、カードを使って2文字以上の言葉を作っていくゲームである。5枚ずつのカードを順に出して言葉を作り、早くカードがなくなった方が勝ちである。5分くらいの短い時間で実施でき、楽しみながら取り組むことができる。



(写真3 「語彙力アップ!ひらがなりバーシ」)

「語彙力アップ!ひらがなりバーシ」(ハナヤマ)は、文字を使ったリバーシである。2文字の言葉を作って、間にはさんだ相手の駒を裏返して自分のものにできる。リバーシで遊ぶ感覚で言葉作りの学習をすることができる。



他者理解が難しい児童にブロックを使って伝えるゲーム

友だちの気持ちや場の状況が理解できずに、友だちとうまくコミュニケーションをとることに苦戦している児童がいる。SSTカードを使って場の状況を学んだり、トラブルが起こった時に、視覚的に

関係を示して相手の本当の意図を伝え、どうすればよかったかを考えさせたりしている。それと並行して、言葉で自分の意図を相手にうまく伝えるためにはどうすればいいかを、レゴブロックを使ってゲーム感覚で学習している。

ブロックを好きなように組み立て、それを衝立の向こうにいる教師に言葉だけで伝えるというものである。ブロックの大きさ、色、場所(左右の違い)など、どうすれば相手かわかるかを相手の立場に立って考えさせることができる。うまく伝わったときには「今の言い方よくわかったよ」など、プラスの評価をするようにしている。

(写真4 ブロックを使った伝えるゲーム)



(3) 通級指導がクラスへの「カタパルト」になるために

通級指導教室がクラスへの「カタパルト」の役割を果たすためには、個別指導と同じくらいに、担任との連携と、通常の学級のユニバーサルデザインを取り入れたクラス、授業作りが大切である。以下に、通級に通う児童の担任との連携、学校全体への啓発について述べることにする。

「通級指導の記録」を連携のツールとして活用する。

毎回の授業の後には、「通級指導の記録」を作成し、担任と情報共有をしている。ゆっくり担任と話す時間が取りにくいことが多いため、指導記録の中にできるだけ詳しく指導内容とその時の様子、「こんな話をしました」ということを書くようにしている。最後には感想を交えた意見を書くようにし、それに対して担任から返事を書いてもらっている。担任からは記録を読んだ感想だけでなく、学級で変化が見られたことや、今困っていること、トラブルなど様々な情報が寄せられる。それをもとにして次の授業の内容を考えることもよくある。特に時間が取りにくい巡回校では有効な連絡ツールであると考える。

学校全体への啓発ために「コーディネーター通信」の発行

勤務校の職員向けに、月に2号程度不定期に「コーディネーター通信」を発行している。A4裏表に、ユニバーサルデザインについての話だけでなく、特別支援教育に関する様々な話題をいろいろな角度から取り上げ、発信していくようにしている。今年で3年目の実践であるが、今年度は勤務校だけでなく、巡回校でも必要と思われる内容の号をコーディネーターに渡し、職員に配布していただくようにしている。以下は今年度取り上げた内容の一部である。

- ・「通級指導って何？」
- ・「継次処理と同時処理」
- ・「自尊感情について」
- ・「放課後デイサービス等について」
- ・「となりのトトロを深読みする！」
- ・「トムとジェリーはなぜ面白い？」
- ・「愛着障害って？」
- ・「匠の技を紹介！」

担任の先生方の日頃の実践を「匠の技」として紹介し、特別支援教育の視点で意味付けを行ったり、市の巡回相談で受けた助言のうち、全体に広めたいことを紹介したりもしている。

またなかなか接点を持つことがないSSWの先生にインタビューをし、職員への啓発を図ることも行った。

真面目な内容から、時にはおふざけも交えて、楽しみながら特別支援教育について考えてもらう機会になればと思い発行を続けている。

(図2 今年度の通信の内容例)

2.取組の成果

(1) ゲーム感覚で取り組める課題を取り入れたことで、「勉強している」「やらされている」というのではなく、苦手なことでも楽しんで取り組めるようになった。また、ゲームをしながら「よく言葉知ってるねえ」「こんな言葉思いついたんや!」など、プラスの評価を即時に返すことができ、児童の自己肯定感の向上にもつながっていると考える。また、ゲームとして取り組むことで「勝ちたい」「うまくやりたい」「伝えたい」と、取り組んでいることに必要性が生まれ、うまくできたときの達成感も味わうことができる。

授業の最後に「お楽しみタイム」として取り組むこともあり、そういう時は、児童が勝てるように教師が忖度をし、気持よく教室に戻っていけるような工夫も行っている。

(2) 「通級指導の記録」を連携のツールとすることで、時間を取りにくい場合でも児童の様子やその日の成果、頑張りを担任と共有するようになっている。頑張ったことについては「今日は～頑張ったんやね」とクラスで担任からも声かけをしてもらっている。通級での指導内容をクラスでも継続してもらうこともある。

児童によっては、通級指導とクラスで、それぞれ違った姿を見せることがあり、それを担任と交流できることで、多面的に子供の姿をとらえることにも役立っている。

(3) 「コーディネーター通信」の中でユニバーサルデザインに関する内容を発信してきたことで、教室環境、情報の伝達の仕方、教材などに先生方の工夫がみられるようになった。また、特別支援を意識せずに行っている工夫を「匠の技」として紹介することで、「これもユニバーサルデザインの工夫になるのか」と思ってもらえ、自分の実践を特別支援教育の視点で振り返ってもらう機会にもなっていると考える。

先生方から「気になる子どもがいるので見てほしい」という相談のほか、「通信の内容についてももう少し詳しく教えて欲しい」「これに書かれていることは～さんのことかもしれない」など、通信によって気づきが促され、児童についていろいろな先生と話をする機会が増えてきている。

3.課題及び今後の取り組みの方向性

児童の特性に応じた個別指導ができることが通級指導の大きな利点であり、強味である。その中で個別指導だからこそできる指導内容としてゲームを取り入れた課題作りを行ってきた。興味を持って、意欲的に取り組み、達成感を持たせることができる反面、遊びの要素に流されてしまい、学習としての積み上げが見えにくという面もある。プリントなどを使った学習とゲームを使った学習をうまく配分しながら、苦手なことへも意欲的に取り組み、自分で伸びを実感できるような方法を模索しているところである。

担任との連携、学校全体への啓発にはコーディネーターの働きも大切になってくる。担任に直接伝えられなかったことをコーディネーターを介して伝えたり、学校全体への啓発方法をコーディネーターと相談しながら進めたりしているところである。

今後も児童にとっても、教師にとっても有意義な通級指導になるように研究に励んでいきたいと考える。

(参考図書:「実践ソーシャルスキルマニュアル」上野一彦 岡田智 編著 明治図書)